

Title	素環刀の型式学的研究
Author(s)	禹, 在柄
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1991, 25, p. 83-113
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48051">https://hdl.handle.net/11094/48051</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 素環刀の型式学的研究

禹 在 柄

はじめに

小稿の目的は東アジアの鉄器文化の発展と伝播に伴う地域間の交流を解明することである。このため古代東アジア地域に広く分布する素環刀の型式学的研究を基礎として東アジアの諸地域間の交流を追求することとしたい。

なお、ここで素環刀とは「素環頭柄刀」とも呼ばれるものである。すなわち、刀の柄の基部が環状を呈し、かつ環体の内側に装飾を施さないものをいう。

最初に素環刀に関する研究史を整理し、次に「一」～「二」において素環刀の型式分類を行う。「三」～「五」においては素環刀の変遷と編年を考察し、同時にその変化の背景を追求する。ただし、本稿では鉄製品に限定して考察することにした。

素環刀の型式学的研究において、これまでの研究者がまず注目した点はその長さを分類の基準として大刀や短刀や刀子などに区別することであった。

今尾文昭は一五cm前後から三〇cm未満のものを刀子とし、大刀はA類「三〇〜五〇cm前後、六〇cm未満」とB類「六〇cm以上」とに分類した。<sup>(1)</sup>

また素環刀をさらに細かく型式分類するにあたって環頭の製作技法と形態が重視された。

杉原和雄は環頭と刀身との連結技法の差によって二型式に分類した。このうちA型式は茎の端を円形に曲げ、これを環頭とする共作りのものである。またB型式は円形の鉄環を別に作り、茎の端を折り曲げるようにして鉄環を固定する別作りのものである。<sup>(2)</sup>

また児玉真一は素環部分の平面形のバラエティを中心に二型式に分けている。すなわち、I型とは柄が素環頭のほぼ中央に位置するようにつくられるものである。II型は素環頭が柄の背部側から直線的にのびてリングを作り出すものである。<sup>(3)</sup>

素環刀の長さあるいは製作技法や形態による以上の型式学的研究は日本での出土資料を主な対象としてきた。しかし小林行雄が指摘したように大陸の実例による変遷と編年の検討が可能な遺物である以上、日本出土品とともに中国や朝鮮半島出土品も型式学的研究の対象とすべきである。

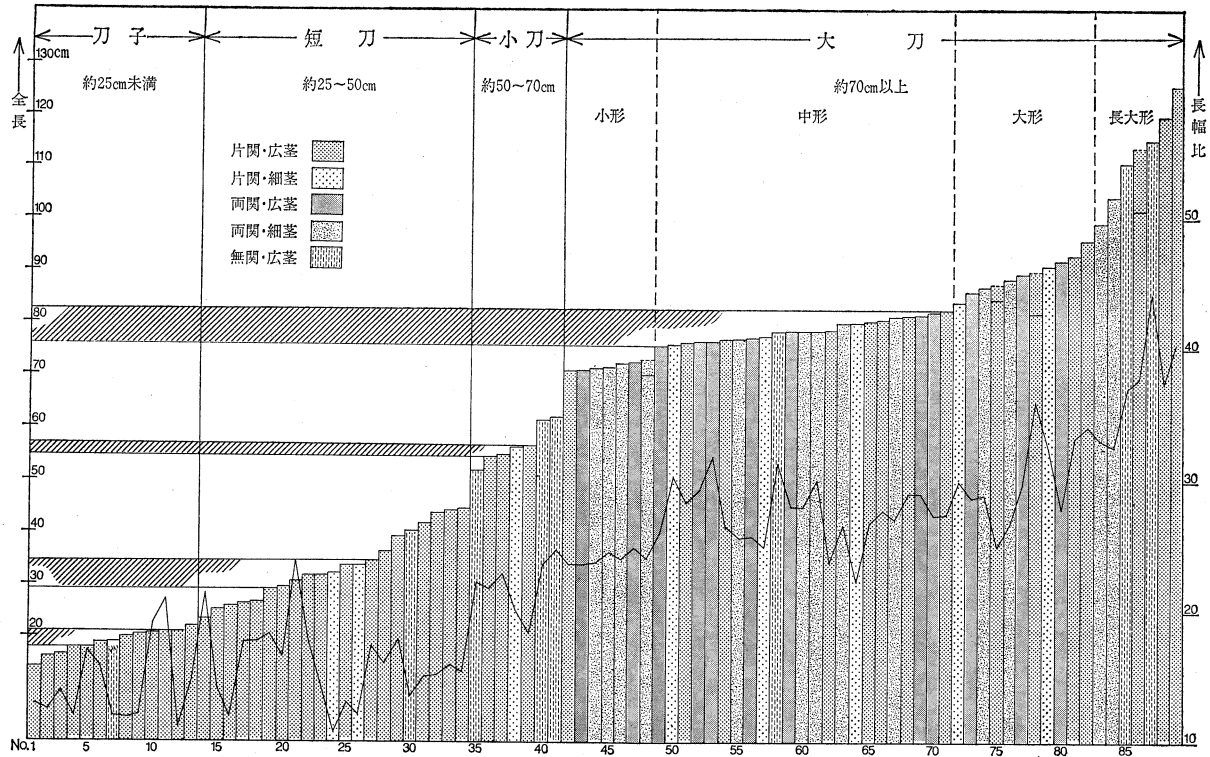
この点で中国の『洛陽焼溝漢墓』において、墓から出土した素環刀の長さを基準として分類を行っているの参考になる。このうち注目されるのは出土状況などによって武器、書刀のような工具としてのナイフ、また厨房用ナイフなどを区別し、分類している点である。<sup>(4)</sup> 弥生時代の短い素環刀について、その出土状況からは武器と工具用ナイフとを明確に区分しきれない点とは対照的であり、中国の研究成果に学ぶべきことを示唆する。

一 素環刀の器種分類——大刀・小刀・短刀・刀子

1 長さによる分類

これまでの素環刀の分類において研究者間で混乱が多いのは大刀、短刀、刀子など規模による分類基準の不一致である。なお、これら環刀の規模による差は機能の差を反映することが多く、この意味において大刀、短刀、刀子などは器種にあたるものと考えたい。ところでこの器種分類にあたり、私は個々の素環刀の規模のデータを統計的に処理し、より客観的な区分を試みたい。そのためにまず中国、朝鮮半島、日本出土の資料のうちほぼ全形を保っている八九例（八三遺跡出土）を対象に長さ一センチメートルを単位とする統計階級ごとの度数分布を調べることとする。その結果は図一の棒グラフに示すとおりである。<sup>(5)</sup>

棒グラフの大きな特徴として指摘できることは七一cm（No. 42）と八二・五cm（No. 71）の集中的分布である。その中でも長さ七五・六cm（No. 49）と八二・五cm（No. 71）の集中はとくに目立つ。そして棒グラフ上に見られる長さの最も大きな変化点は六二・一cm（No. 41）から七一cm（No. 42）までの間にある。もう一箇所四四・七cm（No. 34）から五二cm（No. 35）までの変化も目につく。この二箇所長さの大きな変化に挟まれた五二cm（No. 35）から六二・一cm（No. 41）までの間に集中分布が見られる。このように約五〇cm以上の刀については約七〇cmを境にして大きく二つのグループに分類できる。したがって七五・六cmから八二・五cmに集中分布が見られる約七〇cm以上の例を大刀グループと分類し、以下大刀と呼ぶ。約五〇cmと七〇cm未満を示し、他と明瞭に離れた分布を見せる五二cm（No. 35）と六二・一cm（No. 41）の例は小刀と分類することにする。



図一 素環刀の規模と型式による分類(棒グラフは全長を示し、折れ線グラフは長幅比を示す)

大刀はさらに四つに細分することが可能である。まず長さの集中分布を見せる七一 cm (No. 42) ～ 八二・五 cm (No. 71) のうち、七一 cm (No. 42) ～ 七三 cm (No. 48) と七五・六 cm (No. 49) ～ 八二・五 cm (No. 71) の二つのグループに分けることが可能である。また八二・五 cm (No. 71) より大きい大刀についても、約一 m 以上と八四 cm (No. 72) ～ 九五・八 cm (No. 82) とに細分することができる。そこで私は七一 cm (No. 42) ～ 七三 cm (No. 48) の例を小形大刀、七五・六 cm (No. 49) ～ 八二・五 cm (No. 71) を中形大刀、八四 cm (No. 72) ～ 九五・八 cm (No. 82) を大形大刀、九九 cm (No. 83) 以上の例を長大形大刀と名付けることとする。

以上のように小刀、大刀は長さを基準として画然と分類することが可能であったが、一四・一 cm (No. 1) ～ 四四・七 cm (No. 34) の間には小刀、大刀の如き目立つ分岐点は認められない。しかしながら長さの差に注目すると三つの集中した分布域を認めることも可能である。すなわち、二九・二 cm (No. 19) ～ 三四・八 cm (No. 27) の部分と一七・八 cm (No. 4) ～ 二一 cm (No. 12) の部分、そして二五・四 cm (No. 15) ～ 二六・八 cm (No. 18) の部分の三箇所である。このうち、二六・八 cm (No. 18) より長い例は二九・二 cm ～ 三四・八 cm にとくにピークがあるが、これを短刀とし、一七・八 cm ～ 二一 cm を中心とする二三・五 cm (No. 14) より短い例を刀子 (ナイフ) と分類することとする。一方、刀子と短刀との中間的な長さをもつ二五・四 cm ～ 二六・八 cm の例は短刀の型式学的特徴により近いことから、それらを短刀に含めておくことにしたい。したがって約二五 cm を境にして刀子と短刀との二つに分類することとする。

ヨーロッパ青銅器時代において、短い dagger がナイフとして使われたと推定され、実際にそれらはしばしば適当に knife-dagger と呼ばれていたことを V・G・チャイルドは指摘している<sup>(6)</sup>。材質上の差は存在するものの、ナイフと短刀との中間的な長さをもつ前述した素環刀の二五・四 cm ～ 二六・八 cm の例もこのような性格をもつ例であ

らう。

## 2 長幅比との対応関係

日本古代の刀剣の製作における鍛錬と焼入などの造刀法の研究は進んでおり、古代中国の刀剣の発展過程の研究においても鍛錬と焼入の問題は重要視されてきた。<sup>(8)</sup> これらの研究に明らかなように刀剣の製作技術は自然科学的分析によって解明することが可能である。したがって刀剣製作上の技術水準が刀の外形に反映されるのであれば、型式学的分析による変遷過程を追求することによって刀剣の編年や系譜を推定することも可能であろう。

この問題については、チャイルドによる青銅製刀剣類の研究が参考になる。彼は *dagger* の重要な特徴として、突き刺す際の重圧によるひずみや折損を防ぐための何らかの工夫があったことを指摘している。<sup>(9)</sup> 私は素環刀にもこれに類似した工夫があったのではないかと推定して、以下の考察を進めたい。

この工夫の第一として刀身の背を厚くすることが想起されよう。すなわち、刀身の断面が二等辺三角形になるように製作することである。このことが力学的剛度を考慮した工夫であったことは言うまでもない。

第二の工夫は鍛錬、焼入などによって内部組織の剛度を高くすることであろう。内部組織の強化なしに丈夫で長い刀を作るためには刀の幅と厚さを増加させることが要求されるが、重量のはなはだしい増加は武器を使う視点からは有効ではない。したがって鍛錬、焼入などによる内部組織の剛度を高くすることによって幅と厚さの増加率を低下させ、これによってより強度の大きい刀が作りうる。この剛度と重量との釣り合い関係を基礎として刀子、短刀、小刀、大刀の器種別に効率的な長さ、幅、厚さの比率が出現するのではないか。先に考察したように素環刀の長さに規則性が認められることは、それを示唆しているが、さらに刀身の長さ、幅、厚さの三者の比率を調べるこ

とよつてこの問題を考へてみよう。ただし、出土した素環刀は、その銹化によつて厚さの測定値に誤差が含まれるため、ここでは長さとの幅の關係にしぼつて論ずることとする。

図一の折れ線グラフは素環刀の長幅比（長さを幅で割つた數値）を示している。長さによる分類において小形大刀と分類した七一cm (No. 42) ～七三cm (No. 48) の連続する七例の長幅比は二三・五～二五に集中している。各例の長幅比の差はわずかに一・五以下であり、長さの差も約二cm以下である。

次に長さ七五・六cm (No. 49) ～八二・五cm (No. 71) の中形大刀は部分的な長幅比の高低が見られるが、長幅比は約二二～三二の幅に分布する。連続的に分布するNo. 55とNo. 56、No. 59とNo. 60、No. 68とNo. 69、No. 70とNo. 71は各々ほぼ同じ長さと長幅比を有する。

全体的には小形大刀は長幅比約二四前後に、中形大刀は約二六～二八前後に集中する傾向が見られる。小形、中形大刀は長さと長幅比とが最も敏感に対応していることが窺える。

八四cm (No. 72) ～九五・八cm (No. 82) の大形大刀は比較的急な傾斜の棒グラフを示しており、長幅比の分布幅は約二五～三六である。

最も急な傾斜の棒グラフを示す九九cm (No. 83) ～一二五・三cm (No. 89) の長形大刀の長幅比の分布幅は三二・五～四四・二である。

大形、長形大刀の長さと長幅比の対応關係は棒グラフと折れ線グラフの傾向が示すように長さが長いほど長幅比も高くなる傾向が見られる。ただし、No. 87のように非常に長幅比の高い例の存在も注目される。

五二cm (No. 35) ～六二・一cm (No. 41) の小刀は一八・三～二四・八の長幅比の分布幅をもっており、全般的には



刀が長くなるにつれて長幅比も高くなる比例関係を示している。しかしながら No. 38 と No. 39 は No. 35 と No. 37 より長いにもかかわらず長幅比は低くなる例である。

二三・五 cm (No. 14) と四四・七 cm (No. 34) の短刀は図一の折れ線グラフから判明するように、長さの傾向に比べて非常に不規則な長幅比をもっている。No. 14 と No. 21 のように長さに比べてとくに高い長幅比をもつ例も目につく。しかしながら連続的に分布する二六・六 cm (No. 17) と二九・二 cm (No. 19) の三例は長幅比が約一八前後、四二 cm (No. 31) と四四・七 cm (No. 34) の四例は約一五前後に集中していることが指摘できる。

一四・一 cm (No. 1) と二二・二 cm (No. 13) の刀子は短刀のように長さの傾向に比べて非常に不規則な長幅比を示している。とりわけ No. 11 は二〇・九と刀子の中でずば抜けて高い長幅比を示している。しかし一九 cm (No. 7) と二〇・五 cm (No. 9) の三例を中心に約一二前後の低い長幅比を示す例が多く見られることも刀子の特徴である。

以上、素環刀の長さとの長幅比の対応関係の考察をもとに、効率的な刀の長さとの幅の比率が存在したか否かに焦点をあてて分析した。この中で小刀と小形、中形の大刀に長さとの長幅比との対応関係の規則性が顕著に見られる。このことから、素環刀の中で小刀および小形、中形の大刀が武器として有用性の高い典型化された例であったといえるよう。

## 二 素環刀の細分型式——関・茎・刃先・環頭の属性

### 1 関と茎と刃先

素環刀の型式学的分類を追求する上で、刀の長さおよび刀身の力学的構造を反映する長幅比は重要であるが、柄

1 関			2 茎				3 刃先			
(1)無 関	(2)片 関	(3)両 関	(1)広茎 A	(2)広茎 B	(3)細茎 A	(4)細茎 B	(1)標 準	(2)外 反 り	(3)背 部 削 り 込 み	(4)先 細
			茎幅 身幅 > 1/2	茎幅 身幅 = 1/2	茎幅 身幅 < 1/2	茎幅 身幅 < 1/2				
4 環頭										
(1)形態						(2)対称関係				
①楕円	②円	③方	④五角	⑤六角	⑥扇	①対称	②非対称			

図二 素環刀の型式概念図

の着装部の関と茎の変化もまた重要な要素である。図一の棒グラフの中に関と茎との型式の組み合わせによって五つの型式グループに分類したものを表示した。これは関を無関、片関、両関の三つ、茎を広茎、細茎の二つに分け、さらにこれらを組み合わせたものである。

一方、刃先の型式も素環刀の型式分類において一つの要素であるが、それを標準、外反り、背部削り込み、先細の四つに分類することにする(図二の型式概念図を参照)。

素環刀子についてみれば、図一に示した刀子一三例の中で無関・広茎 A タイプの No. 13 以外はすべてが片関・広茎 A タイプであることが特徴である。外反り刃先や先細刃先も存在するが標準刃先(六例)と背部削り込み刃先(四例)の例が多い。

素環短刀についてみれば、図一の二一例の中で片関・広茎 A タイプの例(一五例)が最も多い。刀子と同様無関・広茎 A タイプが一例あるが、刀子になかった片関・細茎 A、B の例が各々一例存在する。標準刃先(八例)が多く、次に先細刃先(六例)、外反り刃先(四例)、背部削り込み刃先(二例)の順である。このように短刀の関・茎と刃先の型式学的特徴は刀子のそれと類似する傾向を示す。

素環小刀についていえば、図一の七例の中で三例が無関・広茎Aであることが特徴である。標準刃先と背部刳り込み刃先が三例ずつ存在する。先細刃先と外反り刃先が存在しないことが刀子や短刀と大きく異なる点である。

図一の素環大刀の四八例を関・茎を基準に分類を行った結果は次のようである。無関・広茎A二例、無関・広茎B一例、片関・広茎A一一例、片関・広茎B四例、片関・細茎A四例、片関・細茎B一例、両関・広茎A九例、両関・細茎A八例、両関・細茎B五例、不明三例である。刀子や短刀と同様無関・広茎タイプの例が少ない。関だけをみれば、無関が三例、片関が二〇例、両関が二二例である。図一で示す両関タイプのすべてが大刀に属していることが大きな特徴である。片関と両関の比率はほぼ同じであるが片関、両関の各タイプ内の広茎と細茎の比率は対照的に異なる。すなわち、片関タイプ内では広茎(一五例)が細茎(五例)より多く存在する。その反面、両関タイプ内では広茎(九例)より細茎(二三例)が多い。素環刀の変遷の流れについては「五」において後述するが、大刀の場合少なくとも西日本地域と韓国東南地域でみるかぎり、大局的には片関から両関へ、広茎から細茎への型式変遷が認められる。図一の大刀の特徴としてもう一つ注目される点是小形大刀の大多数が両関であり、なおかつ細茎が多い点である。小形大刀に型式学的に新しい要素が多く存在する点是小形大刀の意味を考える上で重要であろう。一方、刃先の型式においては小刀と同様に先細刃先と外反り刃先は存在しない。しかし背部刳り込み刃先(二例)に比べて標準刃先(三二例)の占める比率は小刀より圧倒的に多い。ところで図一のNo.88は刀身の先端部が細身に先細刃先にみえなくないが刃先の形態から一応標準刃先に属するものと分類する。

## 2 環頭の形態

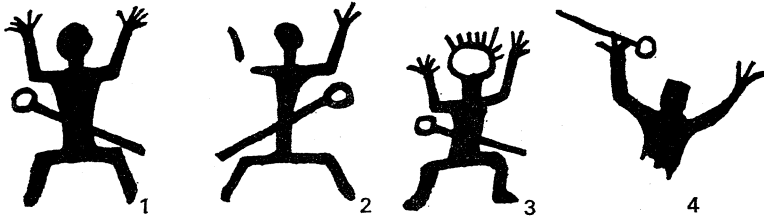
環頭の型式については環頭が茎を中心に左右対称になっているかどうかを基準とする対称関係による分類と楕円形、方形などの環頭の平面形による分類とを組み合わせて型式分類することにする(図二の型式概念図を参照)。

刀子についていえば、一三例の中で環頭が茎を中心にほぼ左右対称になっている対称型は六例であり、そのうち楕円形は四例、円形は二例である。非対称型は七例あり、うち六例は環頭が刃側に片寄る偏刃楕円形(三例)と偏刃円形(三例)である。残る一例は環頭が背側に片寄る偏背楕円形である。対称型と非対称型の比率が、ほぼ同じであり、また楕円形(八例)は円形(五例)に比べて多い点の特徴である。

短刀についていえば、二一例の中、対称型は一七例あり、そのうち楕円形一一例、円形六例である。非対称型は四例あり、うち三例が楕円形、一例が円形である。刀子に比べて対称型(一七例)に対する非対称型(四例)の比率が低い点が目につく。楕円形(二四例)に対する円形(七例)の比率は刀子と類似する。

小刀についてみれば、七例の中には刀子や短刀に多く見られた非対称型が姿を消していることが注目される。刀子や短刀に見られない方形が一例あり、他に楕円形四例、円形一例、不明一例である。楕円形に対する円形の比率は刀子や短刀に比べて一段と低い。

大刀についていえば、四八例の中には小刀と同様非対称型は見られない。楕円形が三二例、円形と六角形が各々一例、五角形と扇形が二例ずつ、方形九例、不明一例である。大刀では楕円形が最も多いが方形も比較的多く見られる。楕円形に対する円形の比率は刀子、短刀、小刀に比べて一番低い。五角形、六角形、扇形など環頭の形態に装飾的な多様性が見られるのも注目される。



図三 広西左江流域の岩壁画中の素環刀（注10文献）

### 三 中国における素環刀の出現と発達

#### 1 素環刀の出現

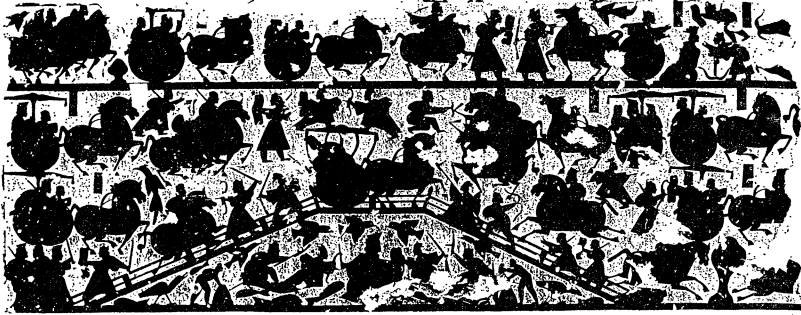
東アジアにおける素環刀の出現と発達の考察において、中国はまず最初に検討すべき地域である。ところが、中国における鉄製素環刀の出現時期はまだ十分に解明されていない。ただ洛陽中州路のM二七一七墓から素環短刀が、秦始皇陵兵馬俑一号坑からは素環刀子が出土したことを考慮すれば、鉄製の素環刀は刀子や短刀において、すでに戦国時代には出現していたと考えられる。

一方、広西壮族自治区の左江流域の岩壁画中の素環刀の絵（図三）を湖南省衡山で出土した靴形銅鉞上の素環刀の文様と関連づけて、岩壁画に見える素環刀の上限を戦国時代に求める説も出されている。<sup>(10)</sup>しかし壁画に描かれたものが刀子であるか大刀であるか、また銅製か鉄製かについては今後の検討が必要であろう。

なお、素環小刀や大刀は洛陽の焼溝と西郊の発掘調査資料によって、洛陽地方においては前漢時代には出現していたことが明らかになっている。

#### 2 素環刀の盛行

鉄製素環刀子の出現と盛行は、それ以前に盛行した青銅製素環刀子を基礎とするも



1



2

図四 武氏祠漢画像石（注14文献）

のであり、工具における材質の変化といえよう。これにたいし漢代の素環大刀の出現と盛行は刀子から大刀へという規模の大型化にとどまらない。それは工具の段階から工具と武器との機能分化という質的变化と把握すべきであろう。

さて、漢代に鉄製素環刀が大盛行する背景はなにか。林沅は青銅製素環刀子の利点として、第一に刀身と柄の堅固な連結などの製作上の利点、第二に携帯上の利点をあげている。<sup>(11)</sup> 工具としての鉄製素環刀はこのような利点が基礎となって、ひき続き盛行したと思われる。しかし武器としての鉄製素環刀の大盛行には、この他にも戦術上の利点が一要素として作用したものと考えられる。

環頭にひもを付けて使用することが漢代の画像石の絵（図四）から知りうる。このことがこの問題に接近する上で鍵になる。ひもの機能として第一に裝飾的役割<sup>(12)</sup>、また第二に環頭に結びつけ、か

つ手に巻きつける機能<sup>(13)</sup>などを考える説がある。これにたいし私は戦闘場面を描いた武氏画像石<sup>(14)</sup>の分析からさらに次のことを重視したい。画像の中で攻撃側は環頭にひもを付けているが攻撃を受けている側はひもを付けていない。おそらく攻撃側と防御側という敵対する二つの軍事集団の差を作者が意識して表現したものと思われる。攻撃側が敵との区別のための標識として環頭にひもを付けるこのような戦術は、孫臏兵法などで強調されている月光の下での夜襲などの「月戦」において、とくに効力を発揮したものと推測する。

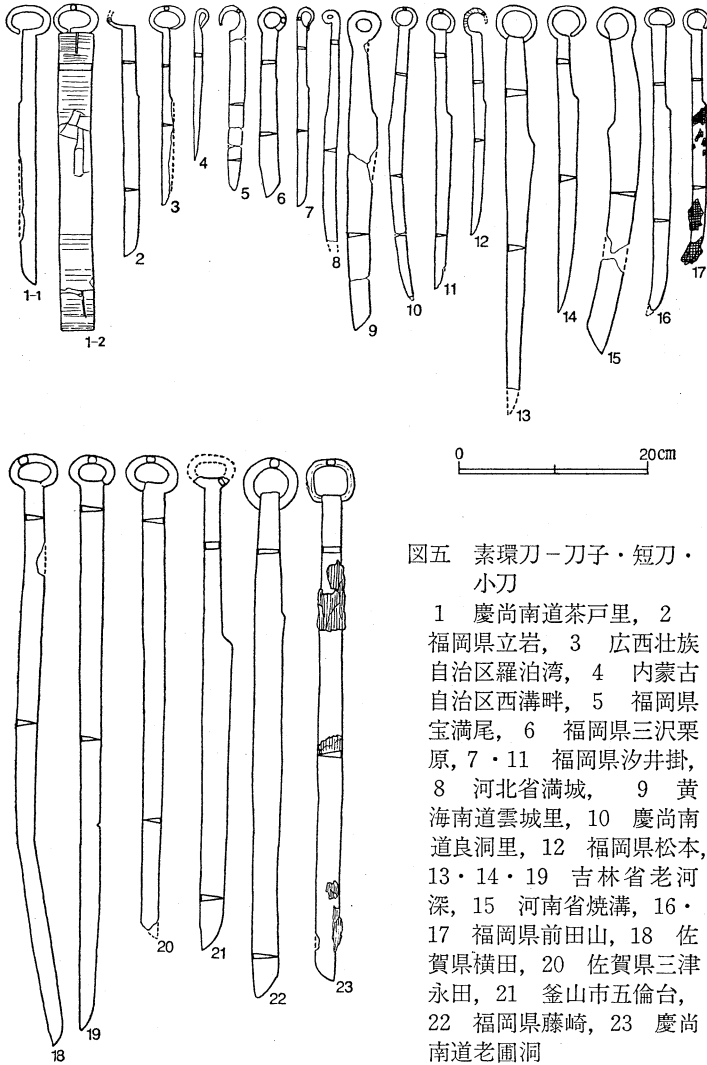
### 3 素環刀の型式学的特徴と地域性

#### (1) 中国中原地域

洛陽の焼溝や西郊などの前漢墓の発掘調査資料によって、前漢時代に刀身と柄との間の明瞭な区分がない特徴をもつ素環大刀が盛行していたことはすでに指摘されている<sup>(15)</sup>。しかし洛陽焼溝漢墓出土の素環刀の中には刀身と柄の間が明瞭に区分できる片関を成す例(図五—15)も存在する。したがってこの例が短刀である点を考慮すれば、同じ素環刀であっても刀子や短刀と大刀との間には型式差が存在したことが窺える。

#### (2) 中国西南地域

前漢初期と編年される広西壮族自治区の羅泊湾一号墓の五号殉葬木棺からは、一三才前後の少年の人骨と共に全長一三六cmの木材と二本の角質漆鞘の鉄剣、一本の素環刀子の残片が出土している。二本の鉄剣のうち一本は全長一三〇・二cmの長大なものである。報告者は木材と鉄剣の副葬などから、この殉葬少年を墓主の生前の侍従と推定する<sup>(16)</sup>。一号墓の墓葬の規模などから、報告者が考察するように生前の墓主がこの地域の最高統治者に準ずる人物であつ



図五 素環刀-刀子·短刀·小刀

- 1 慶尚南道茶戸里, 2 福岡県立岩, 3 広西壮族自治区羅泊湾, 4 内蒙古自治区西溝畔, 5 福岡県宝満尾, 6 福岡県三沢栗原, 7・11 福岡県沙井掛, 8 河北省満城, 9 黄海南道雲城里, 10 慶尚南道良洞里, 12 福岡県松本, 13・14・19 吉林省老河深, 15 河南省焼溝, 16・17 福岡県前田山, 18 佐賀県横田, 20 佐賀県三津永田, 21 釜山市五倫台, 22 福岡県藤崎, 23 慶尚南道老圃洞



たことは十分考えられる。この点を考慮すれば、主棺が盗掘を受けて不明な点はあるが、少なくとも前漢初期の広西地方において首長の主な武器は素環大刀ではなく長大な鉄剣であったことが窺える。

一方、この一号墓の槨室中室からは中原、西南地域の型式学的特徴ともいえる非常に直線的な背部と楕円形環頭、標準刃先を有する片関・広茎Aタイプの素環刀子(図五—3)が出土している。

### (3) 中国東北地域

漢代の中国東北地域においても、素環刀が盛行していたことが、近年報告された吉林省老河深遺跡の発掘によって明らかになった。前漢末後漢初と推定されるこの遺跡出土の素環刀には洛陽漢墓出土品のような長大な素環大刀は見られない。

片関・広茎Bタイプに属し、さらに先細刃先、円形環頭を有する素環短刀(図五—13・14)はこの地域の型式学的特徴をもつ代表的な例であろう。私はこのような型式学的特徴を中国の北方草原地域において遊牧民族の慣用の工具であった青銅刀子の形態上の特徴と伝統が作用したものと考えたい。

また老河深遺跡では刀身と柄との間が明瞭に区分できない無関タイプの素環刀(図五—19)も出土している。この型式学的特徴は先述した前漢時代の洛陽漢墓出土品を中心とする素環刀の特徴をひくものと考えられる。

このような現象を中国東北地域の在地的要素と中原などからの外来的要素の並存と理解することも可能であろう。

## 四 朝鮮半島と日本の素環刀

### 1 韓国東南地域

義昌郡茶戸里一号墓からは鞘に納められた状態の素環短刀(図五—1—2)が出土している。この一号墓の年代は伴出した五銖銭、星雲鏡などから紀元前一世紀後半と推定されている。<sup>(17)</sup>ところで、この短刀の特徴の第一は、刃部の中央部の欠損が著しい点である。使用時にこの部位が主に使われた可能性が高い。第二は、環頭と鞘口が密着している点である。この場合の環頭の役割は刀身を鞘に納める際、柄部全体が鞘の中に入ってしまうことを防ぐ機能と考えられる。武器として機能的ではない。以上の二点を総合すると、この短刀は武器としてよりも工具としての機能をもつものといえる。

さて、先述した中国西南の前漢初期の羅泊湾一号墓出土品(図五—3)とこの茶戸里一号墓出土品とは型式学的に類似性が極めて高い。両例は長幅比が近似し、片闕・広茎Aタイプであり、標準刃先を有する。また刀身幅に比べて横長の典型的な楕円形で共作りの環頭を有する。両例は各々遠く離れた地域で出土したにもかかわらず前漢時代の例であり、型式学的にも類似することから、系譜的に近いものといえよう。

金海郡良洞里八号墓の出土品(図五—10)は刀身全体が外反り傾向を呈し、先細刃先と円形環頭を有するなど、茶戸里一号墓出土品とは型式学的な差が見られる。

この遺跡は二世紀後半と推定されるが、近接地域の茶戸里一号墓出土品との型式学的な差はおそらく年代的な差を反映するものと考えられる。しかし先細刃先と円形環頭の特徴をもつ例(図五—13・14)が前漢末後漢初の中国東北の老河深遺跡からも出土していることはすでに述べた。したがって紀元前一世紀の茶戸里一号墓段階の朝鮮半島にも標準刃先と楕円形環頭を有するタイプと共に先細刃先と円形環頭を有するタイプが刀子や短刀型式における二者として、並存していたことも考えられる。

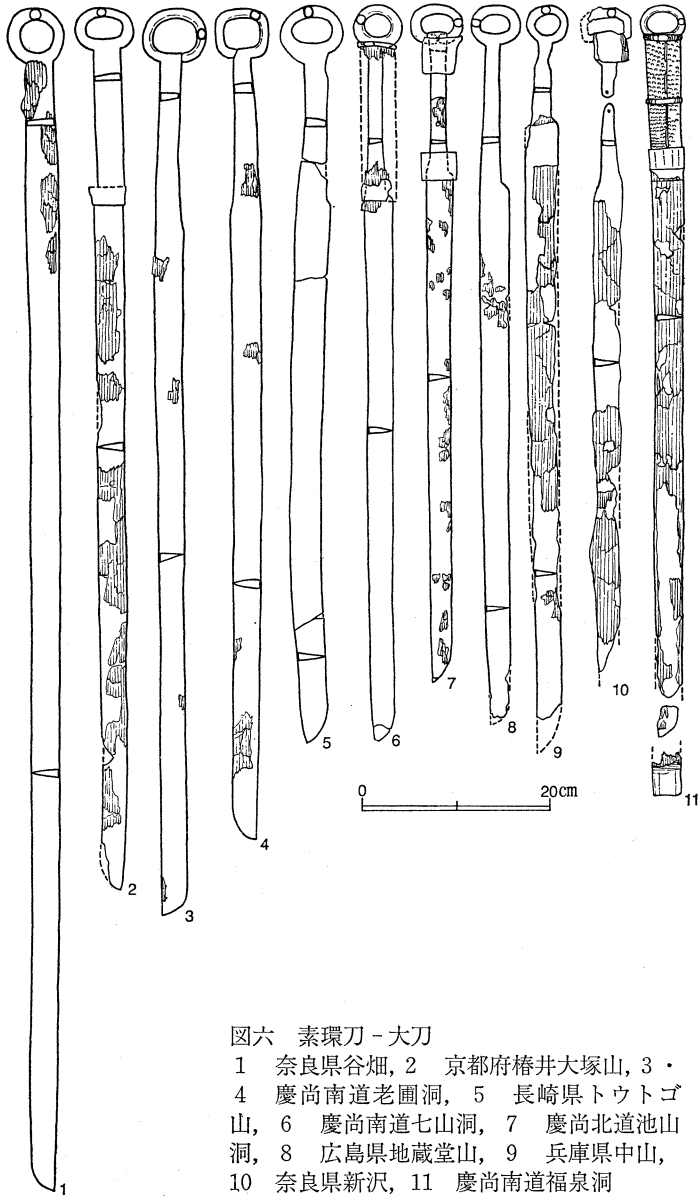
以上は刀子、短刀の特徴であるが、小刀にも型式学的な差が存在する。釜山市老圃洞三三号墳出土品(図五—23)は小さな刃関を有する片関・広茎Aタイプである。一方、釜山市五倫台九号墳出土品(図五—21)は明瞭な刃関を有する片関・細茎Bタイプである。老圃洞三三号墳は出土土器によって三世紀の第三の四半期に編年される。五倫台九号墳は五世紀中葉と編年される。<sup>(18)</sup>したがってこの両例の型式学的な差はその年代的な差を反映するものと考えられる。

さて、小刀を出土した老圃洞三三号墳からは大刀の資料(図六—4)が伴出している。小さな刃関を有し、さらに若干の背関が認められる大刀である。三世紀の第四の四半期に編年される老圃洞三一号墳出土品(図六—3)も小さな刃関をもつタイプの大刀であるが背関は認められない。しかし両例の刃関、背関は後述する分厚い木柄や柄金具の着装を意識して意図的に作られたと見られる関とは区別しなければならない。

型式学的に類似し、時期と地域的にも接近した両例は約九〇cm前後の大形大刀である点も共通している。環頭の形態においては三三号墳出土の大刀は典型的な方形、三一号墳の大刀は楕円形と異なる。

老圃洞三三、三一号両墳出土の小刀、大刀の型式学的特徴はそれ以前の茶戸里一号墓や良洞里八号墓段階の刀子、短刀と比べて広茎と楕円形環頭を有する点で類似する。しかし規模の差や無関タイプの影響が強く残る小さな刃関、方形環頭をもつ点に明らかなように、新しい要素を含んでいると評価できる。

五世紀前半以後の古墳から出土する小刀、大刀の第一の特徴は明瞭な刃関をもつ例が盛行することである。三世紀後半と考える前述の老圃洞三三、三一号墳出土品に比べて最も大きな変化は、分厚い木柄や柄金具の着装のための明瞭な関を有する点である。



図六 素環刀 - 大刀

- 1 奈良県谷畑, 2 京都府椿井大塚山, 3 ·  
 4 慶尚南道老圃洞, 5 長崎県トウトゴ  
 山, 6 慶尚南道七山洞, 7 慶尚北道池山  
 洞, 8 広島県地藏堂山, 9 兵庫県中山,  
 10 奈良県新沢, 11 慶尚南道福泉洞

第二に刀の規模においても変化が起り、約七二cm前後の小形大刀と約七九cm前後の中形大刀が盛行する。細茎で小形大刀の典型的な例は高霊郡池山洞三二NW—一号墳出土品(図六—七)であり、細茎で中形大刀の典型例は金海市七山洞Ⅲ—一五号墳出土品(図六—六)である。このような小形、中形大刀の大きさは大刀の中でも実戦においてより有効と考えられる。しかし小刀の場合は顕著な規模の変化は見られない。すなわち三世紀後半の老圃洞三三号墳出土品と五世紀中葉の五倫台九号墳出土品は共に約五六cm前後の典型的な小刀の規模を示している。

第三の特徴は環頭の製作に別作り技法が盛行し、環頭の形態も多様化することである。

以上に述べた細茎型式、実戦に適した大刀、環頭の別作り技法という三つの要素は韓国東南地域においては五世紀前半以後の素環刀に盛行するとしても、これらの要素がいつまで遡るのかは現時点では十分解明されていない。ただ約七九cm前後の中形大刀に属する例が韓国東南地域に近い日本の対馬で出土している点は重要である。それは弥生後期と編年される上県郡トウトゴ山墳墓群の一号石棺出土品(図六—五)である。また別作り技法による環頭の連接技法は前漢末後漢初に編年される中国東北の老河深遺跡の短刀において確認しうる。<sup>(19)</sup>また日本では大阪府崇禪寺遺跡において、弥生終末の庄内期の土壙より別作り環頭を有する大刀の柄部が出土している。このような諸例からみて、韓国東南地域においても、これら三つの要素の出現期は五世紀前半以後の盛行時期を相当に遡る可能性がある。この問題の解明は今後の資料増加をふまえて検討すべきであろう。

## 2 西日本地域

弥生中期後半の福岡県立岩三六号甕棺出土の素環短刀(図五—2)は韓国東南部の茶戸里一号墓出土品(図五—1

—1—と長さ、長幅比などの型式学的特徴が極めて類似する。両例は年代的にも接近し、標準刃先と楕円形環頭を有する片闕・広茎Aタイプである。中国西南地域の羅泊灣一号墓出土品(図五—3)とも系譜的なつながりが窺える。

一方、福岡県松本遺跡出土品(図五—12)と福岡県汐井掛遺跡D一六七出土品(図五—11)は韓国東南地域の良洞里八号墓出土品(図五—10)に比べて刀身の外反り傾向は著しくないが同じ片闕・広茎Aタイプの特徴をもつなど類似する。また中国東北地域の老河深遺跡出土品(図五—13・14)の特徴ともいえる先細刃先と円形環頭を有する。これらの三つの地域の出土品は系譜的な関連性をもつものと考えられる。

さて、弥生遺跡出土の刀子、短刀の特筆すべき型式学的特徴は環頭が刃側に片寄る非対称型環頭を多く有する点である。ところでこの非対称型環頭は環頭が刃側に完全に片寄る偏刃タイプ(図五—5)と完全に片寄らず背側に若干の突出部を残すタイプ(図五—6)の二者に細分することが可能である。前者は中国内蒙古自治区の「西溝畔漢代匈奴墓地」において、この墓地付近ではほぼ同時期と推定される遺跡から採集された素環刀子(図五—4)にその類例を求めうる。また前漢中期の中国河北省滿城一号墓からも同種の素環短刀(図五—8)が出土している。これにたいし後者のタイプは朝鮮半島西北部の黄海南道雲城里三号墓出土の短刀(図五—9)に類例がある。このような類例は遠く離れた地域での出土品であるが西日本出土の二者と系譜的につながる可能性は高い。

ところで先述の「偏刃環頭」を有する例の中で汐井掛遺跡のD一八九出土品(図五—7)とD四出土品は環頭を作るに際し輪の先端を細めて刃側の茎端に沿わせる特徴を持っていることが判明した。報告者が指摘したように両例は環頭部の作りにおいて酷似する。狭い地域内におけるこのような型式学的類似性は狭い範囲内の共通性と考えるとよいだろう。

また一方、形態上の若干の差異点は認められるが広く西日本地域に偏り環頭を有する例が見られる点は重要である。この点は集団間交流を反映する広い地域間の共通性と思われる。

狭い範囲の地域性を現わす別の例は福岡県前田山遺跡の九号石棺出土品(図五—17)と五号土壙墓出土品(図五—16)の二例である。両例は顕著な外反り刃先を有する片関・広茎Aタイプの素環短刀であり、長幅比もほぼ同一数値を示すなど極めて類似する。

このような地域性の広狭の差をもたらす社会的背景の解明は今後の研究課題である。

弥生後期前半〜中頃と編年される佐賀県三津永田遺跡の一〇四号甕棺出土品(図五—20)と佐賀県横田遺跡出土品(図五—18)は共作りの典型的な楕円形環頭を有する無関タイプの小刀である。茎断面も二等辺三角形を呈するなど極めて類似した型式学的特徴を示す。これらが型式学的に類似するだけではなく接近した時期と地域に属することは両例の系譜が共通であることを示すものと考えられる。前漢末後漢初の中国東北地域の老河深遺跡からも両例と類似する特徴をもつ例(図五—19)が出土している。両例とは系譜的なつながりが窺える。

大刀の本格的盛行は弥生終末期から古墳前期にかけて始まる。京都府椿井大塚山古墳出土品(図六—2)のように、小さな刃関を有する片関・広茎タイプの約九〇cm前後の大形大刀の出現が第一の特徴である。またこの大形大刀の型式学的特徴に類似する特徴をもつ福岡県藤崎遺跡の箱式石棺出土品(図五—22)のような小刀の出現も注目すべき点である。第二の特徴は別作り技法の環頭を持つ大刀の出現である。先述のように大阪府崇禅寺遺跡において庄内式土器と伴出した例が確認<sup>(2)</sup>されている。

四世紀後葉から五世紀初め頃になると様相は変わる。福岡県一貴山銚子塚古墳の三本の素環大刀の副葬など素環

大刀の多量副葬が特徴である。また約一二〇cmを越える長大な大刀(図六一―一)の副葬も特徴的である。

五世紀中葉から後葉にかけては片関・細茎タイプの例(図六一―八)や両関・細茎タイプの例(図六一―九)が出現する。さらに柄金具を着装する例(図六一―十)の出現も特徴的である。大刀の規模にも変化が現われ、とくに実戦において、より有効な規模と考えられる小形、中形大刀が盛行するようになるのもこの時期の特徴である。

## 五 素環刀変遷の画期と背景

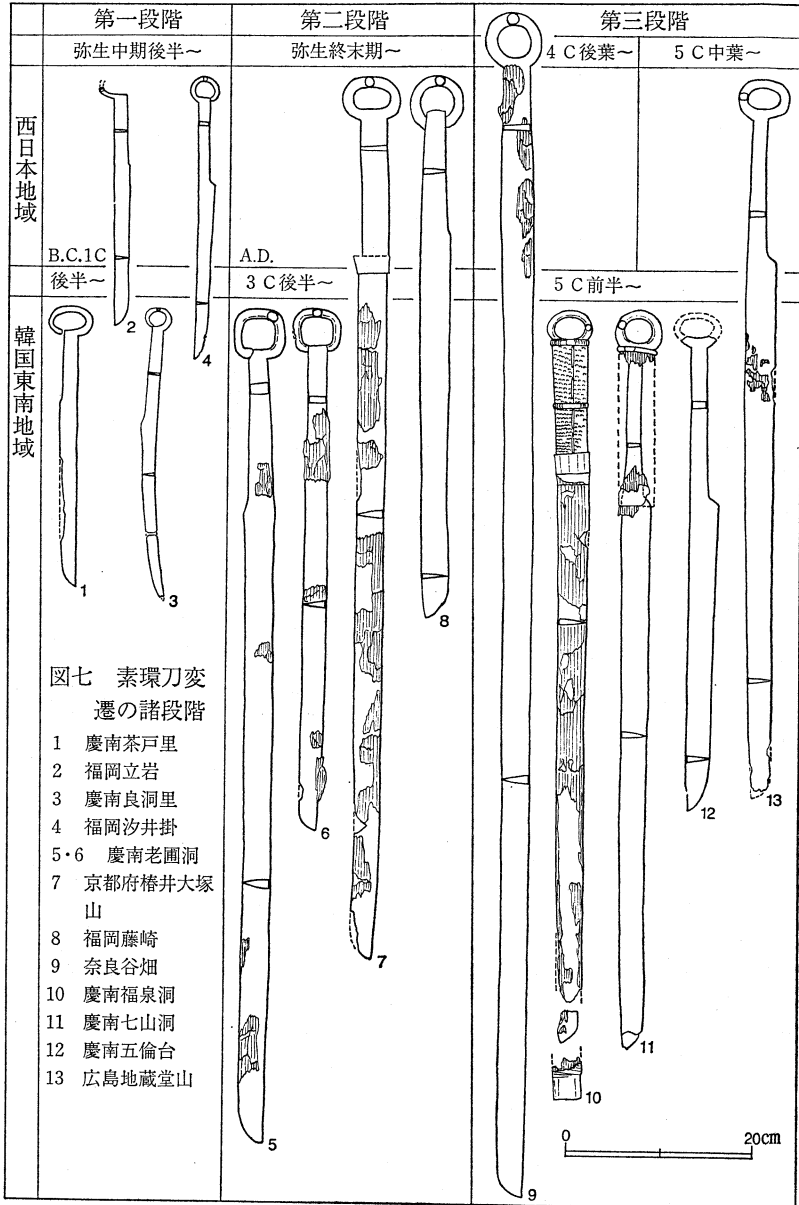
以上の型式学的考察を基礎とすると、韓国東南地域と西日本地域における素環刀の変遷には次のような三つの画期を指摘できよう(図七)。

### 1 韓国東南地域

この地域における第一の画期は五銖銭、星雲鏡と共に素環短刀が出土する紀元前一世紀後半の茶戸里一号墓段階に求められる。この段階には青銅短剣や鉄製短剣が伴出する。またこの素環短刀と中国西南地域の前漢初期の羅泊湾一号墓出土の素環刀子とは型式学的に類似する。このことから第一の画期には前漢の影響が背景にあると考えられる。

第二の画期は三世紀後半の老圃洞三一、三三号墳段階に設定する。小さな刃関を有する約九〇cm前後の大形大刀の出土が特徴的である。小刀と大刀がセットになって出土することや方形環頭を有する例が現われる点も重要である。中国三国時代の魏、呉、蜀の激しい対立を背景とする刀の製作技術の発達と大量生産に伴う規格化に影響を受





けたものと考えられる。

第三の画期は五世紀前半と考えられる。これ以後は明瞭な関を有する細茎タイプの小形、中形大刀が盛行する。また装飾的な柄金具の着装も盛行し始める。

細茎タイプの大刀は相対的に刀の重心が無関や広茎タイプの大刀より刀身の方に置かれる傾向が見られる。また茎幅が細くなるにつれてより厚い木柄の着装も可能になる。厚い木柄は斬撃時、手に及ぶ衝撃を減らすことを可能とする。適度な長さで衝撃減少の工夫をもつこの種の大刀は馬のスピードを利用する騎馬戦においては特に有効であらう。

木柄が厚くなるにつれて木柄を固定させるのに柄金具が補強材として使われるようになったと考えられる。同時に装飾文様を施した銅製の柄金具(図六―11)が登場することから、柄金具は実用的機能以外に装飾的な機能をもっていたことも明らかである。

第三の画期には第一に騎馬戦の普及、第二に素環大刀の柄金具の装飾化に象徴されるように、所持者の地位の視覚的表現を必要とする社会的、政治的状况が背景にあったと考えられる。

## 2 西日本地域

第一の画期は弥生時代中期後半である。刀子、短刀を中心とする素環刀が出現する時期である。型式学的には漢代の中国中原地域や西南地域の要素と朝鮮半島を含む中国北部や東北地域の要素が並存する。いずれも漢代の中国大陸の影響が第一の画期の背景に認めうる。

第二の画期は弥生終末期である。弥生後期には素環刀の型式学的共通性つまり斉一性が著しく広がるが当時の集団間交流を反映するものと考えられる。しかし素環刀の導入時の形態的特徴は大きく変わっていない。さて、弥生終末期になると崇禪寺遺跡出土品のように別作り技法の環頭を有する大刀が出現する。また小さな刃関を有する約九〇cm前後の大形大刀の出現とこの大形大刀の形態に類似する小刀の出現もこの画期の特徴である。韓国東南地域と同様に三国時代中国の影響を受けたことがその背景にあると考えられる。

もう一つの背景は西日本地域における内在的な要因である。すなわち前方後円墳出現直前の政治状況のもとで、当時の中国大陆で流行する素環大刀などの威信財を持つことによって、所持者の権威を表現する必要性が高まった結果と考えられる。

第三の画期は五世紀代に存在するが、これはさらに二つの小画期に分けうる。

第一の小画期は四世紀後葉から五世紀初め頃である。一つの古墳に素環大刀を多量副葬する特徴が見られる。また約一二〇cmを越える長大な大刀の存在が顕著である。このうち、一つの古墳に素環大刀を多量副葬する特徴は韓国東南地域の五世紀前半の第三の画期にも見られる点である。しかし韓国東南地域の場合は柄金具などを装飾することによって所持者の地位を表現したのにたいし、西日本では約一二〇cmを越え、実戦での使用に適さない長大な大刀(図六一)によって所持者の権威を視覚的に表現しようとした点は異なる。このように西日本地域と韓国東南地域において権威の視覚的表現方法が異なるとはいえ、素環大刀が権威を誇示する道具として機能したことは重要な点である。第一の小画期をもたらす背景は広開土王碑文に描かれる四〇〇年前後の政治的緊張など国際情勢の変化に起因する点が大きいと推定する。

第三の画期における第二の小画期は五世紀中葉から後葉である。分厚い木柄や柄金具の装着が意識的に採用される。その意図を反映して明瞭な関を有する細茎タイプの小形、中形大刀が盛行し始める。このような素環大刀の出現と盛行には先述したように騎馬戦の導入が背景にあると考えるべきであろう。またこの傾向は韓国東南地域の第三の画期にも認められる現象であり、頻繁な戦争を通じて実戦においてより効果的な素環刀が出現し、盛行したものと考えられる。つまり五世紀中葉に始まる第二の小画期は東アジア諸国との国際関係が背景にあると考えられる。しかし現時点ではこの小画期をもたらす系譜を一元的に追求することには慎重でありたい。この小画期をめぐる東アジアの政治的社会的情勢は、より複雑であるから、今後東アジアを範囲とする武器や武具全般を視野にいった包括的分析を実施した上で再論することとしたい。

#### まとめ

小稿では素環刀の型式学的分析を基礎として、東アジア地域における素環刀の出現と変遷過程を追求した。以下にその主要な論点をまとめることにする。

- (1) 素環刀の規模について、刀身をも含めたデータを基礎として統計的整理を試み、新たな分類基準を提示した。これによって素環刀を刀子、短刀、小刀、大刀の四つの器種に分類する客観的根拠を示した。
- (2) 素環刀の四つの部分（関・茎・刃先・環頭）の属性を基準として型式を細分した。また各器種ごとに属性相互の関係を統計的に分析した。この結果、器種別に特徴的な傾向が存在することが明らかになった。
- (3) 中国漢代における素環大刀の出現と盛行を工具から武器の分離独立という質的变化と把握した。また武器とし

ての素環刀の盛行には戦術上の利点が一要素として作用したと考えた。さらに中原、西南、東北の各地域には在地的特徴をもつ素環刀と外来的要素をもつ素環刀が並存する現象がみられた。

(4) 韓国東南地域と西日本地域には素環刀の出現と変遷過程にそれぞれ三つの画期が認められた。両地域の第一の画期は漢代中国の影響による素環刀の出現期にあたる。第二の画期は三国時代中国の影響を受ける時期である。とくに西日本地域の場合は前方後円墳出現直前の政治状況のもとで、中国大陸で流行する素環大刀などの威信財をもつことによって、所持者の権威を表現する必要性が高まるという内在的要因が背景にあると考えられる。第三の画期は五世紀である。西日本では四世紀後葉から五世紀初にかけて素環大刀を多量副葬する現象と長大形大刀の出現が顕著である。東アジアの政治的緊張がその背景であろう。韓国東南地域では五世紀前半以後細茎タイプの大刀が盛行する。騎馬戦の普及に伴う現象であろう。西日本地域においても五世紀中葉以後同じ現象が現われる。こうして環刀の変遷とその画期が東アジア世界内においてきわめて緊密に連動していることを再度強調して筆をおくことにしたい。<sup>(2)</sup>

〔謝辞〕小稿は一九九〇年に大阪大学大学院に提出した修士論文を基礎に叙述の大幅な修正と論旨の変更を行ったものである。厳しく指導して下さった都出比呂志先生にお礼申し上げます。また福永伸哉先生をはじめ、青谷尚美、松木武彦、北條芳隆、佐々木憲一、楠山遵由、朴天秀、吉沢美香、杉井健、芦田妙美、清家章、大庭重信の諸賢のほか大阪大学の先輩、同学には心からの御協力をいただいた。なお、辻本直男、杉江正敏、月山貞利の諸先生からは刀剣の製作技術に関して有益な御教示をいただいた。さらに執筆の際、資料調査において安在皓、任鶴鐘、岡部

裕俊、岡村秀典、置田雅昭、小野山節、蒲原宏行、金貞姫、金貞礼、金正完、後藤直、塩屋勝利、申敬澈、全玉年、角浩行、田中壽夫、千賀久、趙榮濟、鄭澄元、中島達也、中村徹也、西谷正、禰宜田佳男、河仁秀、朴升圭、菱田哲郎、広瀬和雄、洪順光、丸山康晴、柳本照男、李相憲、李柱憲、李海蓮、李榮勲、渡辺芳郎、大阪府立弥生文化博物館、小郡市埋蔵文化財センター、春日市教育委員会、九州大学考古学研究室、京都大学考古学研究室、慶尚大  
 学校博物館、慶星大学校博物館、佐賀県立博物館、奈良県立橿原考古学研究所、韓国国立晋州博物館、韓国国立中央博物館、福岡市埋蔵文化財センター、福岡市立歴史資料館、釜山市立博物館、釜山大学校博物館、前原町教育委員会、山口県埋蔵文化財センター、の諸先生、諸賢ならびに諸機関の御世話になった。心より感謝の意を表したい。  
 大阪大学名誉教授の黒田俊雄先生の御健勝をお祈りしながら、小論を先生に献呈する。

## 注

- (1) 今尾文昭「素環頭鉄刀考」『考古学論叢』『橿原考古学研究所紀要』第八冊、一九八二年、一六一—一七頁。  
 (2) 杉原和雄「わが国の鉄製素環頭大刀について」『史想』第一四号、一九六八年、四四—四五頁。  
 (3) 児玉真一「鉄製素環刀」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻、同論文集刊行会、一九八二年、七一六—七一七頁。  
 (4) 中国科学院考古研究所編『洛陽燒溝漢墓』科学出版社、一九五九年、一九三—一九四頁。  
 (5) 図一のグラフ中の番号順に出土遺跡を示しておく。1・4・9・15山口県朝田墳墓群、2佐賀県吉野ヶ里遺跡、3佐賀県椎島山遺跡、5・18福岡県立岩遺跡、6・10・16・20・27福岡県汐井掛遺跡、7福岡県室満尾遺跡、8福岡県三沢栗原遺跡、11広西壮族自治區羅泊湾一号墓、12福岡県上り立遺跡、13・25福岡県吉武樋渡遺跡、14福岡県松本遺跡、17・22福岡県前田山遺跡、19慶尚南道茶戸里一号墓、21慶尚南道良洞里八号墓、23・24・29・31・40吉林省老河深遺跡、26黄海南道雲城里三号墓、28・74慶尚南道道溪洞古墳群、30佐賀県みやこ遺跡、32・36佐賀県二塚山遺跡、33福岡県丸尾台遺跡、34佐賀県妻山四号古墳、35佐賀県三津永田遺跡、37・77・82釜山市老圃洞遺跡、38・67釜山市五倫

- 台古墳群、39 福岡県藤崎遺跡、41 佐賀県横田遺跡、42・71・75 福岡県一貴山銚子塚古墳、43・48 奈良県新沢千塚古墳群、44・52・61・69・83 慶尚南道玉田古墳群、45・53 慶尚北道池山洞古墳群、46 和歌山県百合山二号墳、47 岡山県押入西一号墳、49 釜山市鶴巢台古墳群、50 慶尚南道礼安里二八号墳、51 釜山市福泉洞一号墳、54 京都府丸山古墳、55・56 慶尚南道白川里一号墳、57 広島県地藏堂山一号墳、58 奈良県池ノ内七号墳、59・80 釜山市福泉洞二二号墳、60・84 慶尚南道七山洞古墳群、62 長崎県対馬トウトゴ山墳墓群、63 兵庫県中山一二号墳、64 釜山大学所蔵品(伝金海出土)、65 福岡県平原遺跡、66 福岡県鋤先古墳、68 島根県奥才一四号墳、70 釜山市塊亭洞古墳群、72・76 釜山大学所蔵品(伝慶州河洞出土)、73 兵庫県宮山古墳、78 福岡県老司古墳、79 長野県フネ古墳、81 京都府椿井大塚山古墳、85・87 天理参考館所蔵品(伝中国出土)、86 福岡県向谷一号墳、88 福岡県向原遺跡、89 奈良県谷畑古墳。
- (6) Childs, V. G., *The bronze age*, Cambridge: Cambridge University Press, 1930, pp. 94-97.
- (7) 末永雅雄『日本上代の武器』弘文堂書房、一九四一年。俄国『日本刀の科学的研究』日立評論社、一九五三年。
- (8) 楊泓『中国古兵器論叢』文物出版社、一九八〇年、一一一—一二七頁。
- (9) Childs, V. G., *op. cit.*, pp. 75-76.
- (10) 广西壮族自治区民族研究所編『广西左江流域崖壁画考察与研究』广西民族出版社、一九八七年、一二七—一三八頁。
- (11) Lin, Yün., 'A Reexamination of the Relationship between Bronzes of the Shang Culture and of the Northern Zone,' (in) Chang, K. C. (ed.), *Studies of Shang archaeology*, New Haven: Yale University Press, 1986, p. 257.
- (12) 町田章「環刀の系譜」『研究論集』Ⅲ、『奈良国立文化財研究所学報』第二十八冊、一九七八年、八三頁。
- (13) 置田雅昭「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学报』第一四五輯、一九八五年、五八一—五九頁。
- (14) 朱錫祿編著『武氏祠漢画像石』山東美術出版社、一九八六年、二四・四三頁。
- (15) 楊泓『中国古兵器論叢』(前掲注8) 一一三頁。
- (16) 广西壮族自治区博物館編『广西貴州羅泊灣漢墓』文物出版社、一九八八年、九五—九六頁。
- (17) 李健茂・李榮勳・尹光鎮・申大坤「義昌茶戶里遺跡發掘進展報告」『考古學誌』第一輯、韓國考古美術研究所、一九八九年。

- (18) 釜山大学校博物館編『東萊福泉洞古墳群Ⅰ』本文、一九八三年、一九頁。
- (19) 吉林省文物考古研究所編『楡樹老河深』文物出版社、一九八七年、七六頁。
- (20) 田広金・郭素新編著『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社、一九八六年、三八九―三九三頁。
- (21) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『三世紀の九州と近畿』一九八三年、一〇一頁、X線写真。
- (22) 小稿の図表で扱った素環刀は基本的に各報告書より引用した資料である。しかし一部に筆者の資料調査による知見にもとづいて改変したものがある。

(大学院後期課程学生)